

一九三〇年代イギリスの

「全国労働者スポーツ協会」の足跡

青 沼 裕 之

本稿は、一九三〇年代イギリスの労働者スポーツ運動の一断面、つまり「全国労働者スポーツ協会」(NWSA、一九三〇年創立。一九三六年に「イギリス労働者スポーツ協会」(BWSA)と名称変更⁽¹⁾)の足跡を、労働組合会議(TUC)及び労働党の関係史料を利用して辿ろうとするものである。NWSA議事録及び当事者の手記・書簡等の史料が未入手の段階では、詳細な研究は今後の課題であるが、NWSAに関する研究において上記史料の検討は欠かせないものであるとともに、先行研究にステイヴン・ジョーンズの実証的研究があるのみという現状においては、上記史料研究による先行研究の批判的検討を試み、重要な史実を確認しておくことは必要であろう。その際、考察で重視されねばならないのが、もう一つの労働者スポーツ組織である「イギリス労働者スポーツ連盟」(BWSF、一九二三年創立)との関係、及びその延長線上で国際的な統一祭典、すなわち一九三六年のバルセロナ人民オリンピックと一九三七年のアントワープ労働者オリンピックアドへの対応の問題であ

る。というのも、組織の分裂よりも共同と国際連帯に光を当てたいと考えるからである⁽⁴⁾。

イギリス労働者スポーツ運動史研究のような各国史研究は、労働者スポーツ運動の世界的展開の一端を解明するためにも、各国独自のスポーツ運動史の一断面を明らかに出すためにも必要であり、しかも日本のスポーツ運動史との比較を可能にするとともに、課題を共有するという意味で重要であると考ええる。

1

まず初めに、一九三〇年にNWSAが創立されるまでの労働者スポーツ運動内部の抗争の経緯を、ジョーンズの一連の研究に因りつつ概略する。

一九二三年四月、BWSFがクラリオン・サイクリングクラブ(CCC、一八九四年創立)のイニシアティブで、労働党とTUCの指導部によって創立された。BWSFの創立に導く指導的地位にあったのが、CCCの議長として一九一三年にベルギーの都市ゲントで開催された第一回国際労働者スポーツ会議に参加し、さらに社会主義労働者スポーツインターナショナル(SWSI、一九二〇年創立)の創立会員の一人であったトム・グルームである。彼の指導のもとにBWSFはスポーツを通じての国際連帯・国際平和を主要任務とし、「スポーツを通じて平和を」「砲弾に替えてフットボールを」のスローガンを掲げてそれを外に示した。そうした国際的路線の当然の結果としてBWSFはSWSIに加盟し、国内的には一九二四年末に

TUCとの正式な協力関係を確立し援助を受けることになった。一九二七年にはTUCに正式に承認された。

こうしたBWSFと労働運動との密接な結び付きの背後で、徐々に共産主義者が組織加入していく。それは、イギリス共産党が結党後まもなくスポーツに対する考え方を改め、労働者スポーツを推進する政治的判断を固めたことと、加えて赤色スポーツインターナショナル(RSI、一九二一年創立)が「スポーツはプロレタリアートの階級闘争の手段」とあるという理念のもとに、階級闘争を承認するすべての労働者に門戸を開いたことによるものであった。共産主義の影響はBWSFの指導部内にも及ぼされ、ウォールサムストー(ロンドン北東部の郊外都市)の共産青年同盟とは正式な協力関係が結ばれることになった。一九二七年八、九月のソビエト連邦へのフットボール・ツアーからの帰国後、そこでの経験と「共産主義的スポーツ」を弁護するパンフレットが作成されたことから指導部内に対立が生じ、翌年四月にはバーミンガムで開催されたBWSF第一回全国大会で、グルームらの社会民主主義的指導部に替わってジョージ・シンフィールドを全国書記とする共産主義的指導部が選出された。⁽⁶⁾

BWSFが共産党の統制下に入ってから以降、労働党とTUCは方針を転換し、自分たちのスポーツ組織を結成する呼びかけを行った。ロンドン労働党はその呼び掛けに答えて、ロンドン労働評議会の支持を得ながら一九二八年に十二クラブよりなる「ロンドン労働党スポーツ協会」(London Labour Party Sports Association)を創立し、そしてそれが核になって一九三〇年にNWSAは創立された。CCCはBWSFのRSIへの加盟に抵抗し、BWSFから離れていった。⁽⁶⁾

以上が、NWSA創立までのBWSF内部の抗争のあらましであるが、ジョーンズが立証したように、BWSFの分裂、より正確にはBWSFからの社会民主主義的会員・組織の脱退及び新組織の結成という事態は、労働党、TUCの方針転換が大きく影響するとともに、共産党の戦術「社会ファシズム論」が亀裂を深める障壁となっていたと思われる。

2

それでは、NWSA創立の事情、そしてその組織特性はいかなるものであったか、この点の考察に進まねばならない。

一九三〇年二月二〇日夜、ロンドンの運輸会館^{トランスポート・ハウス}での会議で、労働運動の軌道内に注目すべき全国スポーツ組織を創立するための種子が蒔かれた。この会議はロンドン労働党スポーツ協会により招集されたが、ロンドン労働党の指導者で第二次労働党内閣の運輸大臣の職にあったハーバート・モリソン議員の欠席のため、TUC内で最大の影響力をもつアーネスト・ベヴィンが議長を務めることで開会された。彼は開会にあたって以下のような宣言をしている。「福利更生クラブ及びそのような性格を有するものとして、雇用者によって運営されているスポーツ組織以上に、我々の運動に対抗して利用されるものを私は知らない。スポーツという媒体を通じて労働者の政治的、産業

的側面を結び合わせることは、我々の全体的な発展に反映されねばならない絆を鍛えるであらう。⁽⁷⁾ TUCは新組織のNWSAを方向づけ、組織の性格を規定しようとしたことが窺われるが、そこに参集した代議員も労働者スポーツ組織の創立を承認するとともに、「ベルファストで表明された通りに、労働者スポーツに関するTUCの意向を実現するために、各々のクラブが最善の努力を尽くすことを誓ひあった」⁽⁸⁾のであった。NWSAの組織的性格をさらに鮮明にするために、「規約」⁽⁹⁾全文を掲載する。

名称―「全国労働者スポーツ協会」と称す。

目的―

- 1 労働者階級諸組織の間でアマチュア・スポーツとレクリエーションを奨励、振興、統制すること
- 2 TUCと労働党の後援のもとに組織されたスポーツ組織を連合すること

3 社会主義労働者スポーツインターナショナル (Lucerne) に加盟すること

4 必要とされるならば、また必要とされるとき、既存のスポーツ組織に加盟すること

会員資格―以下のものからなる。

- a TUC及び／もしくは労働党によって承認された団体と提携しており、これら二つの団体に加盟するに値するスポーツ組織

b それ〔TUC、労働党〕に所属する労働組合及び／もしくは

は労働党のメンバーである諸個人
会員資格に関するすべての疑わしい事例は、TUC総協議会と労働党執行委員会の両者に照会されねばならない。そこでの決定が最終的なものである。

分担金―

- a 組織の場合には、最少限の年間団体費は、最初の五〇人については一組織につき五シリングであるが、それを越える
と年二シリング六ペンスが加算され、以後五〇人を越える
ごとに同額が加算される。

b 個人会員は一会員につき二シリング六ペンスの最少限の個人会費を払わねばならない。

c 大きな組織の場合には、必要とされるならば、協会の執行委員会が特約を結ぶことができねばならない。
総評議会―協会の総評議会は以下のものからなる。

協会の役員、選挙の際に団体費が支払われる加盟団体の代表二名、TUC総協議会の代表一名、労働党執行委員会の代表一名

総評議会は少なくとも年一回は開かれねばならない。

執行委員会―これは以下のものからなる。

総評議会の年次会議で選ばれた六名の者（非参加の組織は執行委員会に一名以上の者が選ばれねばならない。）

協会の役員、TUC総協議会の代表一名、労働党執行委員会の代表一名

協会役員―総評議会の年次会議で選ばれねばならない。

会長／五名以下の副会長

及び、上記の者に委託された以下の役員

議長／副議長／財務担当／書記長

スポーツ委員会―執行委員会は個々のスポーツに関する代表者会議を召集せねばならないが、こうした会議は、執行委員会によって任命されるこうした人物のほかに、会期中にスポーツ委員会を任命せねばならない。

国際会議―協会のどの部門も、最初に執行委員会の許可を得ることなしには、どんな国際契約も結んではならない。

協会の何等かの部門が何等かの国際契約を結びたいと欲するのであれば、そのための請願書が執行委員会に送付されねばならない。執行委員会はそれを受け取ってから十四日以内に明確な回答を与えねばならない。どの部門も問題を論じるにあたって自由に裁量できるのでなければならない。

ジョーンズはNWSAに関する研究の中で、「NWSAの主要な狙いは、全般的な資本主義的協定を信用しないことでも、階級闘争を前進させることでもなく、労働者組織のもとでスポーツを奨励することであった」と結論づけているが、スポーツ振興が本意であったのかは疑問である。この点は検討を要する。

先のベヴィンの宣言からも窺われるように、TUCがスポーツの組織化を通じて労働運動内の結束を固めようとしたことが、先ずは見落されてはならない。TUC及び労働党の公式の報告書にBWSFに関する見解、評価が皆無であることの意味が一方で探られねばならないが、NWSA「規約」の厳格な会員資

格と総評議会の構成・任務からも、NWSAが共産主義の影響力を排除し、労働運動の結集を図る場にするという強い意図が働いていたものと推察される。そして同じく、「規約」の会員資格の規定及びTUCによるスポーツの手段的利用のゆえに、スポーツ振興のためのスポーツ組織としての組織的自立が、原理的に未確立であったことも銘記されるべきである。ジョーンズにはこの点の考察が欠落している。

ところで、一九三〇年という時期は、前年五月の総選挙の結果、労働党が下院の過半数の三〇八議席には満たないものの二八八議席を獲得して、第二次労働党政権を樹立していた時期であり、労働党は国政を左右しうる立場にあった。こうした好条件にも拘らず、NWSAの運動は労働運動の勢力範囲内の運動に止どまることが決定されていた。労働者スポーツ運動の延長線上に国家レベルのスポーツ政策を構想するような壮大な計画も、労働党の報告書には見当たらない。創立時のNWSAは、全労働者へのスポーツの解放を目指す運動としては構想されなかったのである。

3

一九三〇年代を通じてNWSAは組織及び活動の面でどのような発展を遂げたのか、それと関連して、組織特性には変化がみられたのか、この点の検討が次の問題となる。

組織及び運動の面に関しては、極めて小規模ながら一定の前進を示したと言つてよい。それは第一に、会員、加盟団体及び

加盟クラブの増加に現れている。創立時の数は不明であるが、一九三二年に会員数が五〇〇〇人、加盟クラブ数が一四五、加盟団体数が一八、であったのが、一九三四年に、八〇〇〇人、二五〇、二三、となり、一九三六年には、一三〇〇〇人、三八〇、未定、にまで増加した。⁽¹¹⁾これについては多少説明を要する。一九三四年の増加は、会員数四〇〇〇人、加盟クラブ一三〇を抱える全国クラリオン・サイクリングクラブ(NCCC)の加盟に因るものであり、既会員の減少をこの団体の加盟で補った。一九三六年の増加は、後述の会員資格の緩和による個人・クラブの加盟が一つの大きな要因であったと思われる。第二に、組織及び運動面の一定の前進は、スポーツ大会の組織化、国際大会への参加等に現れている。NWSA創立後の最初の最大の催しは、第二回労働者オリンピックアード(ウィーン大会)への参加であった。一九三一年六月二〇日にロンドンのクリスタル・パレスで全国スポーツ大会が開催され、そこで選考された選手がウィーン大会へ派遣された。二八名の競技者チームは参加国中最少のものであったが、「異例にも四位の成績で終えることができて満足であった」と翌年の『TUC議事報告』に記されたように、かなりの競技水準にある労働者が派遣されたのであった。因みに、派遣チームの構成は、陸上競技十一名(うち女性二名)、自転車競技六名、水泳六名、テニス四名(うち女性二名)であり、結果は一位が七、二位が八、三位が五であった。国内のスポーツ組織化状況に目を向けると、伝統的なCCCのイースター競技会、全国フットボール・チャレンジカップ大会

を初め、陸上競技、水泳等の選手権大会が開催されており、一九三二年には「労働者ウィンブルドン」の呼称で親しまれた全国ローン・テニス選手権大会が開催されている。また、国際ラケットにある陸上競技、水泳の他にフットボール、テニス、クリケット、ボクシング、ボート競技、自転車競技、ネットボールの部門に加えて、卓球、チェスの部門が創設され、ダーツ、スキットル等のリーグも開始された。特に興味深いのはゴルフ部門を創設しようとしたことであった。「我々はすべての人気のあるスポーツ部門を有することになろう。…イングランドではたいていゴルフは金のかかるゲームなのであり、しかも公共のコースは皆無なのである。」とNWSA書記長のジョージ・エルヴィンは述べている。ゴルフがどれほど労働者の間で人気があったのか不明であるが、イギリスの労働者スポーツの特性を理解するうえで重要である。

NWSAの組織特性の面に関しては、役員体制は依然としてTUC及び労働党の統制下におかれていたが、一九三六年に会員資格が若干緩和されたことで、NWSAの組織特性も僅かながら変化したと思われる。つまり、「執行委員会が当該団体の社会主義的運営と構成に満足することを条件に、TUCもしくは労働党に加盟して⁽¹²⁾いない労働者スポーツ団体を許容するまでに視野が拡大された」のであった。しかし、資料からは「規約」の改正までには至っていないようである。これについては直接的な言及がないので詳細は不明であるが、一つには、「イギリスの組織であることを国際運動に対して明確にするため」⁽¹³⁾

に「イギリス労働者スポーツ協会」(BWSA)へと名称変更したことに密接に関連しているように思われる。この点に関しては、ジョーンズがBWSFは「一九三五年末頃には既に解散したようである」と結論づけたことの確認が必要であるとともに、この解散によってNWSAがイギリスの唯一の労働者スポーツ組織となる自覚を高めたのか、という点が今後解明されねばならない。それと関わって、共産主義者との共同についてはTUC総協議会によって拒否されたが、共産党の人民戦線戦術が何らかの影響を及ぼし、内部からの緩和の圧力が強まったのか、という点も今後併せて解明されねばならない。これとは別に、会員資格を緩和させたもう一つの要因としては、創立当初からの使命であった次代を担う青年労働者を労働組合運動に獲得するという根強い要請にも拘らず、「今までのところこの組織に明確に所属する組合数は、我々がそうあってほしいと望んでいたほどには多くない」という事情が作用したと推察される。NWSA加盟の組合である事務員・行政職員組合のB・A・バグネリが、「全体として組合は、スポーツが現在の青年労働者の生活の絶え間なく増大する部分となっているという事実を認識すべきであり、我々は純粹に産業的な立場で彼等に単に呼びかけを行う以上のことをせねばならない時期にきている」と述べているのは説得的であるように思われる。

4

バルセロナ人民オリンピックアードへの準備は、イギリスでもベ

ルリン・オリンピック大会ボイコットと結び付けられて進められた。NWSAは一九三五年五月の総会で、TUC、労働党、CCCの支持を得てベルリン・オリンピックをボイコットする決定を下した後、自らが所属するアマチュア陸上協議協会(AAA)に対してボイコットを促す要請を行った。結局AAAの臨時会議では、ボイコットを求める動機は二〇〇票中賛成八票、棄権二七票で無効とされたが、NWSAも遅れ馳せながらボイコットの意思を表明したのであった。ハーバート・エルヴィンによれば、ボイコットの論拠は「オリンピックの条件の一つは、それらのスポーツに参加する者すべてが人種、政治、宗教を問わず、(彼等がアマチュアとしての条件を満たしていれば)参加することができなければならない」ということである。ナチ政府はそうしたルールを非道にも破った」ことにあった。つまりオリンピック精神の否定に対する反対であった。こうした理念のもとに、NWSA/BWSAは一九三六年六月にパリで開かれた国際会議にも代表を送っている。

人民オリンピックアードは、一九三六年七月十九日から二六日にかけて開催される計画であったが、「フランコの反乱」によって実現されなかった。この未発の人民オリンピックアードへはNWSA/BWSAは四四名の競技者チームを派遣している。二八名の陸上競技選手、五名のサイクリスト、四名の水泳選手、五名のテニス・プレーヤー、一名のボクサー、及び一名のチェス競技者がその構成である。彼等は六日間スペインに滞在したが、その間にスペイン労働者支援の集会に参加したほか、中には共

和国の民兵隊に加わって武器を取るものもいた。⁽²⁸⁾ NWSA/BWSAとしての参加の意図は、ベルリン・オリンピック大会反対表明と同様、オリンピック精神の擁護にあったと思われる。

つまり、「真のオリンピック精神を擁護する」という思想に全精力を注ぎ込むことは、自らが受け入れた誠の理念からして、自由を愛する市民でなければならぬようなすべての労働組合員、社会主義者、及び協同組合員の義務⁽²⁹⁾なのであった。ところが、このオリンピック理念擁護と矛盾するはずの取り決めが存在していた。この労働者オリンピックアードは「人民」と冠されていたように、ファシズムに対抗する人民戦線を標榜するものであったが、イギリスではNWSA/BWSAがチームに共産主義者が加わることを公式には禁じており、労働者スポーツの組織的共同には至らなかったのである。

5

アントワープ労働者オリンピックアード⁽²⁸⁾へのNWSA/BWSAの準備は、前年のバルセロナ人民オリンピックアードの準備より早く始められていた。一九三五年の時点で、その為の貯蓄計画の詳細が知られると報じられている。そこにはかなり用意周到に準備しようとする姿勢があった。ベルリン・オリンピック大会中の八月にベルリンで開かれた、国際アマチュア陸上競技委員会(IAAC)でアントワープ労働者オリンピックアードが禁じられたことは、準備をさらに慎重にさせたと思われる。この決定を不満として、NWSA/BWSAの代表はA A Aの総務委

員会と会見したが、その決定に従わなければならないと撥ねつけられた。TUCからウォルター・シトラインが再度この問題でA A Aと討議したが、結局合意には達しなかった。⁽³⁰⁾最終的には、ハーバート・エルヴィンがTUC総協議会でBWSAを代表して「我が代議員に断言しうる一つのことは、我々がそれを、この国ばかりでなく大陸の労働者スポーツ運動に対する挑戦とみなすのだから、我々はそうした禁止を甘んじて受けるつもりはないということである」と述べたように、BWSAはこうした圧力に屈することなく、独自にアントワープ労働者オリンピックアードへ競技者を送る決意を固めたのであった。A A Aからは労働者オリンピックアードに参加するのであれば、参加競技者を除名するという威嚇がなされたが、五〇名前後の競技者は出場する決意であった。⁽³¹⁾TUC総協議会からは基金のために十ポンドが補助され、さらに百ポンドを徴収する呼びかけがBWSAよりなされた。しかし、ついに陸上競技者チームはアントワープに行くことは適わなかったようであるが、フットボール、ローンテニス、卓球、チェスのチームよりなる総勢七〇名の一団が派遣された。⁽³²⁾

一九三八年以降も引き続きBWSAは国内競技会を催し、従来通りの活動を展開しようとした。一九三九年八月には、ベルギー労働者スポーツ協会の後援によって「TUC」で開催された国際労働者スポーツ祭典に五三名の参加者を送っている。しかし一九四〇年を最後に、『労働党会議報告』と『TUC議事報告』からBWSAに関する記述が姿を消した。一九四〇年の

『TUC議事報告』にはこう書かれていた。「現在、スポーツ組織に影響を及ぼしている特別の困難にも拘らず、協会は満場一致で可能なかぎり活動を継続することを決定した。……多くのスポーツ用地が軍隊による利用のために接収されていたし、協会は、大地所や私有の公園がスポーツ・グラウンドに優先して、農業の振興のために取得されるよう要請している農業大臣と連絡をとっていた」と。

*

以上からは明らかのように、NWSAは一九三〇年代を通じて、しかし一九三六年以降若干の変化の兆しはあるが、労働運動内部の運動であり、労働者スポーツの統一戦線を目指すという性格を持つ団体ではなかった。社会民主主義系と共産主義系が共同した二つの労働者オリンピックの際に、二つの労働者スポーツ組織の共同の機会があったにも拘らず、イギリスでは公式には最後まで共同はならなかった。しかし、労働者オリンピック等を通じて国際平和と連帯に寄与した点では、NWSAの功績はイギリス・スポーツ運動史に残る遺産といえよう。そしてまた、スポーツ組織の自立性、オリンピック理念擁護のためのスポーツ運動の共同・連帯、等の理論的、実践的課題を現代に残すものであった。今後の当面の課題は、一九三〇年代のイギリス労働者スポーツ運動の具体像を描くために、もう一つの労働者スポーツ組織であるBWSFの共同、統一への行動を究明することである。

(1) 本稿では以下の史料を利用した。The Labour Party, Report of the Annual Conference, 1930—1939. 「*The Labour Party, Report &略*」; Report of Proceedings at the Annual Trades Union Congress, 1930—1939. 「*The TUC, Report &略*」; Daily Herald, 1930—1939.

(2) NWSA 議事録はロンドンのイギリス共産党文庫に所蔵。但し、一九三五年五月の議事録までは確認できるが、その後のものは不明。共産党がNWSA 議事録を所蔵していたことは、NWSA に対する党の強い関心を物語っている。ジョージ・エルヴィン (NWSA の書記長) 文書はロンドンのイギリス政治・経済科学図書館に所蔵。

(3) Stephen G. Jones, Sport, politics and the working class: Organised labour and sport in inter-war Britain (Manchester 1988). 「*St Jones, Sport &略*」の第五、七章を参照。

(4) ジョーンズは労働者スポーツ運動について分裂や対立の側面を強調しすぎる傾向がある。これは、彼が社会主義運動史における「階級対階級」の時代をクロースアップし、労働党社会主義とマルクス主義、もしくはオフィシャル・レイバーとコミュニストを対比して論じる仕方と関係があると思われる。この点に関しては、レジャーを「社会的闘争の場」とみるイギリス社会史の歴史方法論の問題とも関わるので稿を改めて論じる。

(5) 以上の叙述については、ステイヴン・ジョーンズ、

拙訳「イギリス労働者スポーツ連盟 一九二三—一九三五年」上野卓郎編訳『論集 国際労働者スポーツ』(民衆社、一九八八年)一四八—一五三頁、「以下ジョーズ論文と略」を参照。

- (6) Jones, Sport, p. 106—107.
- (7) Daily Herald, 21 Feb. 1930.
- (8) Ibid.
- (9) Labour Party, Report, 1930, p. 301.
- (10) Jones, Sport, p. 120.
- (11) Labour Party, Report, 1930—1939. 及び TUC, Report, 1930—1939. 因みに「反ファシズム統一戦線のための書籍を提供した「レフト・ブック・クラブ」は、一九三六年に七〇〇名で発足し、最盛期の一九三九年に五八〇〇〇名に達した。B・リード、庄子信訳「レフト・ブック・クラブ」J・クラーク他、久津木他訳「危機と文化 三〇年代のイギリス」(三友社出版、一九八九年)二一九—二三六頁。
- (12) TUC, Report, 1932, p. 101.
- (13) Daily Herald, 3 July 1933.
- (14) 一九三四年の時点で、会長—アーサー・ヘンダーソン(労働党首)、議長—ハーバート・エルヴィン(TUC代表)、副議長—ジョージ・デイトン、財務担当—アーネスト・デヴィース、書記長—ジョージ・エルヴィン、執行委員—フレデリック・ロバーツ(労働党代表)、ドリス・

サンダース(労働党青年同盟代表)であった。

- (15) TUC, Report, 1936, p. 114.
- (16) Ibid. 但し、註(2)で示したことも関わって、一九三五年五月以後BWSAの会議がいつ開かれたのか不明であり、したがってこの名称変更が、それ以降一九三六年九月(TUC年次大会)までの、いつのどういう会議で決定されたのかも明らかでない。
- (17) ジョーンズ論文、一五六頁。
- (18) Jones, Sport, p. 121.
- (19) TUC, Report, 1936, p. 274.
- (20) Ibid., p. 275.
- (21) この過程、事情については、上野卓郎「バルセロナ人オリンピックター『国際スポーツ評論』一九三六年巻とチエコ紙誌からみた」『一橋論叢』第一〇二巻第三号(一九八九年九月)三一四—三三六頁、功刀俊雄「ベルリン・オリンピック反対運動—人民戦線とスポーツ—」『運動文化研究』(学校体育研究同志会年報)第四巻(一九八六年)三八—四三頁、「チエコスロヴァキア労働者スポーツ運動」上野卓郎編訳、前掲書、二八八—三〇四頁、を参照 —以上邦語文献。
- (22) Jones, Sport, p. 183.
- (23) TUC, Report, 1936, p. 276.
- (24) Jones, Sport, p. 185. ジョーンズのこの著書にはヒトラー・オリンピアードの敵、手の国際会議とあるが、

国際オリンピック理念擁護委員会のことか。

- (25) Daily Herald, 2 July 1936.
- (26) 女流画家のフェリシア・ブラウンがそのひとり。川成洋『青春のスペイン戦争』新書(中央公論社、一九八五年)一四頁。
- (27) Jones, Sport, p. 185.
- (28) Ibid., p. 189.
- (29) 功刀俊雄「チェコスロヴァキア労働者スポーツ運動」上野卓郎編訳、前掲書、功刀俊雄訳「アントワープ第三回国際労働者オリンピックアード五〇周年―反ファシズム・反戦闘争におけるその意義―」『コーチングクリニック』第四卷第四号(一九九〇年七月)六〇―六三頁、を参照―以上邦語文献。
- (30) TUC, Report, 1937, p. 108.
- (31) Ibid., p. 257.
- (32) Daily Herald, 5 July 1937.
- (33) TUC, Report, 1937, p. 257.
- (34) TUC, Report, 1939, p. 140; Labour Party, Report, 1940, p. 42.
- (35) TUC, Report, 1940, p. 111.

(一橋大学講師)